

かもしれない。WMO の Commission for Climatology を気候委員会と訳し、気候学委員会とは訳さないのも同じである。

6. おわりに

以上我国における気候問題の取り上げられかたについて述べてきた。そのなかには、気候という概念の不明確さの問題、気候学の展開の方向に関する問題という我国だけではない問題もあるが、我国が当面する最大の問題は前章に述べた、気候という言葉がつくと気象学・気象業務の対象外の特殊な問題とってしまうことであろう。

古色蒼然たる地理学の克服さるべき古典的気候学の側から気候学に足を踏み入れた筆者が、もし気候問題について発言するとすれば、本文の2章から4章で述べたことについてであるべきである。すなわち、フィールドサイエンスとしての気候学は、統計的処理の対象とせざるを得ない部分、物理学的決定論では対応しきれない部分を本来持っているということを強調し、気候と社会の関係に対する考え方の明確化を図る立場から批判的に発言することになろう。ところが、筆者が今行っていることは、この批判をするために、我国の気候学に対する理解を、WCRP に関する第1次実行計画のレベルに押し上げようということであり、誠に奇妙なことであると言わざるを得ない。

我国の気候学の理解をせめて外国並に近付ける努力は、大気物理学から気候学にアプローチした人材が行うのが適当であろう。筆者が本来の役割を演ずることができるようになれば、そのことは気候問題が我国で正当に取り上げられたことを意味する。一日でも早くそのような状態になることが望まれる。

しかしながら、筆者ごときが本文のような文章を作成

し得る立場に置かれたことは、異常な好運と感謝すべきことなのかもしれない。

なお、WCRP に関する非公式計画会議については、関口(1986)による報告がある。また測地学審議会で建議された WCRP の国内計画については、山元(1986)による紹介がなされている。

本文の作成に当たって、業務に際し日常的に受けている、気象庁内の各位からの直接的また間接的な御教示を参考とすること大であった。末尾ながら記して感謝の意を表す。

文 献

- Bonacia, L.C.W.(1907): Weather Regarded as a Function of Climate. *Quart. J. R. Met. Soc.*, 33, 213-219.
- 小河原正巳(1957): 気象統計法序論, 気象統計(前編), 気象研究ノート, vol. 8, No. 1 (通巻第54号), 24-29.
- 岡田武松(1938): 気候学, 岩波書店, 156 p.
- 関口理郎(1986): 世界気候研究計画に関する非公式計画会議出席報告, 気候問題懇談会第27回(議事録), 気象庁, 4-20.
- Smagorinsky, J.(1984): The Problem of Climate and Climate Variations (WCP-72), WMO, 14 p.
- 田宮兵衛(1984 a): 気候. 気候変動読本(第2章・気候と気候変動, 第1節), 気象庁総務部, 4-9.
- (1984 b): 気候の表現・気候の認識, 高校通信・東書地理, 東京書籍, No. 240, 4-5.
- WMO(1985): First Implementation Plan for the World Climate Research Programme. WCRP Publication Series No. 5 (WMO/TD No. 80), 123 p.
- 山元龍三郎(1986): 気候変動国際協同研究計画の実施が関係大臣に建議された, 天気, 33, 551-555.

訂 正

頁	場 所	誤	正
624	右の段下から3行目	三村和男	水間満郎
656	左の段下から6行目	三村和男	水間満郎